

○畑辺賢治, 後野剛志, 新名和貴, 中納慎吾, 小笠原敦 (立命館大)

### 1. 研究の背景 (はじめに)

企業にとって経営者が交代することは、企業活動全般に変化をもたらす大きな契機であると考えられる。経営者が交代することにより、企業は良くも悪くも影響を受け、業績が変化する。この経営者交代が与える影響を分析するため一つの仮説を立て検証を行った。その仮説とは経営者自身の経歴によって、つまり、経営畑出身か、技術畑出身か、さらには大学、大学院での専攻が、文系出身（商学部、経営学部等）か、理系出身（理学部、工学部等）かによって企業に与える影響の差異があるのではないかというものである。本研究では、この仮説を検証するため、企業の経営動向を分析するための指標である経営指標（主に収益性、生産性）の変化をもとに経営者交代と企業業績の変化との関係性を調べ、企業の経営者交代の影響について考察を行った。

### 2. 研究方法

調査対象企業として「日経株価指数 300」に含まれる企業を選択し、さらに、経営者の経歴（出身大学、大学院の専攻）が調査可能で、かつ在任期間が2年以上のものを抽出して、これに該当した 118 社を分析対象企業とした。変化を見る経営指標については、総合的に収益性をみることができる売上高経常利益率を選択し、前経営者の最後2年間の平均と現経営者の最初2年間の平均を比較し、経営者交代と経営指標の変化との関係性を分析した。なお、ここでは、2005 年度決算期時点で社長であったものを現経営者、その一世代前の社長を前経営者とした。

### 3. 分析結果の例

経営者の出身大学、大学院の専攻から文系、理系に分類すると、表1となり、文系経営者の数が、理系経営者の約2倍であることがわかった。また、前経営者から現経営者への移り変わりをみると表2となり、文系から文系への移行が最も数が多く、その他は大差ないことがわかった。また、経営者交代の前後での売上高経常利益率の変化を見ると、全体の60%の企業で経営者交代後に売上高経常利益率が向上していることがわかった。さらに、収益性（売上高経常利益率）が何%向上したかを示す収益性向上率を見ると、文系から文系、理系から理系へと同じ専攻への移行の場合は、比率が高く、文系から理系、理系から文系へと異なる専攻への移行の場合は低くなることがわかった。

	前経営者	現経営者
文系	78	79
理系	40	39

表1 分析に用いた経営者の専攻

	該当企業	収益性が向上した企業	収益性向上率
文→文	56	63%	23%
文→理	22	59%	10%
理→文	23	52%	14%
理→理	17	64%	21%

表2 収益性分析結果

#### 4. 考察

文系から理系，理系から文系へと専攻が変わる経営者の移行で，収益性の向上が低くなる原因としては，経営者の基盤が置かれる組織のネットワークのつながりが破壊され，組織パフォーマンスが一旦低下することが理由の一つとして考えられる。

#### 5. 今後の課題

生産性分析など他の経営指標との関係性を分析しつつ，さらにサンプル数を増やし，データの精度を高めたいと考えている。

#### [参考文献]

- ・日本経済新聞社「日経経営指標」
- ・あずさ監査法人「有価証券報告書の見方読み方」